

2026 年 8 月 2 日（聖霊降臨後第 10 主日、A 年特定 13）

メッセージ

「村ではなく、「ここ」で」

（マタイによる福音書14:13-21）

司祭ヨセフ太田信三

夕暮れが迫る頃、弟子たちは群衆を解散させ、村へ食べ物を買に行かせることを主イエスに提案します。人々が養われるのは「ここ」ではなく「村」だと考えたからです。しかし主イエスはそれを許さず、「ここにはパン五つと魚二匹しかありません」と言う弟子たちに、「それをここに持って来なさい」と命じます。

「五千人に食べ物を与える奇跡」は四つの福音書すべてに記されていますが、この言葉があるのはマタイによる福音書だけです。直訳すれば、「それらをここに、私のもとに持って来なさい」となります。「ここ」とは、主イエスがおられるところです。まことの養いは、「村」ではなく、主イエスがおられる「ここ」にあるのです。

弟子たちはパン五つと魚二匹「しか」ないと言いました。当然の感覚でしょう。しかし、主イエスにはそれで十分です。神はゴマ粒より小さなからし種を木になさる方です。小さな種に比べれば、パン五つと魚二匹は、なんと豊かなものでしょう。それが主イエスのもとに持ち込まれると、五千人もの人が「食べて満腹する」ほどのパンとなるのです。

マタイは、この場面を「夕暮れ」と記します。夕暮れの食事は、最後の晚餐を連想させます。マタイはこの奇跡の食事を最後の晚餐と結びつけている、と言われます。群衆を解散させようとする弟子たちに「行かせることはない」と言われたことにも、すべての人を主の晚餐へ招く御心が表れています。弟子の役目は人々を散らすことではなく、その場にとどまらせ、主の晚餐へ招き、主イエスがなさったようにパンを分け与えることなのです。

主イエスが「あなたがたの手で食べ物をあげなさい」と命じたことにより、パンを分かち合う務めは弟子たちに委ねられました。主イエスの手から弟子たちの手へ。主の食卓に招かれた人々は、主イエスがおられる「ここ」で、分かち合われるパンによって養われます。この食卓は、尽きることのない食卓として時空を超え、二千年後の今、この教会の交わりにも現れています。

かつて神がイスラエルの民を荒れ野で養われたように、主イエスも群衆を人里離れた所で養われます。「村」に象徴される社会や経済の働きとは異なる仕方で、主イエスは命の糧を与えてくださるのです。その主イエスは今も「ここ」におられ、命の食卓へわたしたちを招き、養い続けてくださいます。